HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幼児の主張的行動と母親の発達期待との関係 ： 出生順位との関わりについて
Author(s)	幸田, 早苗; 城谷, ゆかり
Citation	北海道大學教育學部紀要, 76, 105-118
Issue Date	1998-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29572
Type	departmental bulletin paper
File Information	76_P105-118.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

幼児の主張的行動と母親の発達期待との関係

——出生順位との関わりについて——

幸田早苗・城谷ゆかり

The Relationship between Children's Assertive Behavior and their Parents' Attitude toward Child-Rearing — On the Birth-Order of the Children —

Sanae KODA and Yukari SHIROTANI

1．問題と目的

主張性（assertiveness），または主張的行動（assertive behavior）は，これまでさまざまに定義されている。初期の定義としては，Wolpe（1985）の「多かれ少なかれ攻撃的な行動ばかりでなく，友好的な感情や愛情のこもった感情，さらに不安をともなわないさまざまな感情の外への表出」が挙げられる。今日の定義には，Harris & Brown（1979）の「他人を脅かしたり，罰したりしないようなしかたで自分の感情，好み，要求，意見を表明すること」，Deluty（1979）の「他人の権利を侵害することなく，個人の思考と感情を，敵対心でないしかたで表現する能力」という定義に示唆されるように，主張的行動は社会的スキルの代表的な行動として扱われている。

Lazarus（1973）は，主張的行動には，①「いいえ」と言える能力，②頼みごとをしたり，要求したりできる能力，③肯定的および否定的感情を表出し得る能力，④一般的な会話を開始し，継続し，終わらせる能力，の4つの成分があるとした。濱口（1993）は，アメリカにおける複数の主張性測定研究で取り上げられた主張的行動を整理し，次の8種類にまとめている。すなわち，①権利の防衛：自己の権利が他者に侵害されたとき抗議する行動，②要求の拒絶：実行できない他者からの要求を拒否する行動，③異なる意見の表明：他者が自分とは異なる定義を述べたとき，自己の意見を述べる行動，④個人的限界の表明：自己の過ち，限界，無知を他者に対して表明する行動，⑤他者に対する援助の要請：自分一人で処理できない問題に出会ったときに，他者に援助を要請する行動，⑥他者に対する肯定的な感情と思考の表明：他者に対する感謝，好意，賞賛を表明する行動，⑦社交的行動：快適かつ容易に他人と社交的相互作用を開始し，維持し，終結する行動，⑧指導的行動：問題解決に向けて，集団や他者に影響を与え，指導する行動，である。なお，これらすべての行動について「攻撃的ではないしかたで，他人の権利を侵害しない範囲で」という前提がついている。このように主張的行動は多次元的なものであると考えられ，近年の研究では，他者との関係を円滑に進めていくための適応的手段として，対人交渉場面における解決方略などを指標に測定する研究が多く見られる。

松田（1986）によれば，幼児期に自分の欲求を表出する（主張する）ことを学び，それらの主張的行動が母親らによって受け入れられることで主張的行動が環境に影響を及ぼしえることの確信を得，その上で，しつけや他の子どもたちとの関わりによって，自分の欲求を一方的に主張することを抑えて，我慢をしたり，意見を調整したりできるようになってゆくのだという。柏木（1988）

は自己調整能力を自己主張・実現面と自己抑制面との2側面からとらえ，幼児期におけるそれらの発達的変化を測定した。その結果，自己抑制行動は年齢の増加とともに順調な上昇傾向をたどるのに対し，自己主張行動の発達はある時点で頭打ちになることを示している。小林（1993）は，幼児に対して仮想の対人葛藤場面を提示し，社会的知識がない時期からある時期へ，その知識を実行できない時期から実行できる時期へ発達することを示した。すなわち，「自分の欲求，希望を主張するだけ」の時期から，「知識としては，社会的な解決方略をもっているが，まだ希望の方がまさっている時期」を経て，「自分の希望を抑えて社会的な知識が実行できる時期」に移降するという。このようにみていくと，主張的行動の発達は，対人葛藤場面において，利己的なものから社会的に望ましい解決方略をとれるようになる方向でとらえることができると考えられる。

発達的時期については，山本（1995）は，対人葛藤場面における解決方略としての主張的行動が4歳から6歳の間に「利己的なものから社会的に望ましいものへ」と変化することを示した。この時期は，柏木（1988）が，「自己主張行動に代わって自己抑制行動の発達が顕著になる」と示した時期と対応している。

本研究では，主張的行動とは，これら先行研究で定義される，一般的にいう主張性を身につけるプロセスにおける自己主張行動および自己抑制行動のことをさす。

ところで，Symonds（1939）による母親の養育態度研究以来，幼児の行動に母親の養育態度が及ぼす影響をとりあげた研究は日本でも多くなされているが，中国における一人っ子研究の結果は興味深い。例えば，一人っ子政策施行後の子どもは概して，家族の期待を一身に集めて大事に保護されて育つため，自立心がなく依頼心が強いと言われる（恒吉・ブーコック，1997）。章（1989）は，一人っ子の性格と家庭の養育態度との関係をとりあげ，現在の中国における親の養育態度を特徴づけている。また，張（1997）は，子どもの性格と親の養育態度との関係を日中比較することにより，それぞれの文化的背景を反映した親の養育態度がそれぞれの子どもの性格形成に影響を及ぼしていることを示した。

主張的行動は，先にも述べたように性格というよりむしろ性格形成の過程における行動ととらえることができるが，いくつかの研究が主張的行動と親の関わりとの関係を指摘している。山本（1995）は，主張的行動の発達について，自己主張行動よりも自己抑制行動への母親の発達期待が大きいことが関係している可能性を指摘している。そして，依田（1987）は，出生順位により主張的行動にちがいがみられることを示した。そして，母親が長子には厳しいしつけ，末子にはおだやかなしつけをとることが影響していると述べている。すなわち，厳しいしつけをうけ，たえず，「お兄さん，お姉さんだから」という意識をもたされる長子は，自分の欲求・意見を主張することを我慢しなければいけない状況が多いのではないかと思われ，逆に，末子はおだやかなしつけをうけ，幼いからと多少のわがままも許してもらえる状況が多いことが影響すると考えられるからである。その結果として，長子は早い時期に自分の欲求・意見を抑えて，親の望む社会的に望ましい行動をとるようになり，末子は自分の欲求・意見を主張しつづける傾向が現れるというちがいをとらえることが可能である。

しかしながら，このように，主張的行動が母親の養育態度の影響を受け，母親の養育態度は出生順位によって影響を受けることが示唆されるが，これらを同時に実証的に扱った研究は見当たらない。

したがって，本研究は，長子・末子という出生順位，母親の養育態度，子どもの主張的行動の

関係を検討することを目的として実施された。本研究における仮説は，以下の３つであった。

①長子は末子よりも早期に社会的に望ましい解決方略をとるようになる。

②母親は長子に対してより制限的な養育態度を示す。

③母親の養育態度が制限的であるほど社会的に望ましい解決方略をとる。

２．方　　法

(1) 出生順位と主張的行動について

ｉ）被　験　児

被験児は，北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センター内北大幼児園の園児10名（男児３名，女児７名），札幌市内私立幼稚園の園児28名（男児16名，女児12名）の合計38名であった。平均年齢は５歳６ヶ月であった。出生順位別および性別では，兄９名，姉10名，弟10名，妹９名であった。このうち，姉１人，弟１人，妹２人が３人きょうだいであり，残りは２人きょうだいであった。

ii）実験期間と実験場所

通園内の一室で，通常の保育時間中に個別実験が行われた。実験期間は，北大幼児園では1995年11月13日～17日までの５日間，私立幼稚園では同年12月13日～16日の３日間であった。実験はすべて同一の実験者１名によってなされ，実験に要した時間は被験児１人つき約15分であった。

iii）実験材料

手にはめて操る人形２体（クマとパンダ）で，遊びをめぐってケンカになる葛藤場面を演じ，それをビデオカメラで録画したものを使用した。葛藤場面は小林（1993）を参考にして，「物の取り合い」と「役の取り合い」の２つの内容で作られた。以下に内容の詳細を述べる。

葛藤場面①（物の取り合い／男女共通）　クマとパンダが登場する。砂場で山を作ることになり，スコップを探しにゆく。クマが１つだけスコップを見つける。１つしかないことを知ったパンダが「私もスコップを使いたい。」とクマの持っているスコップに手をかけるが，クマは「ダメ。」と答える。そこでスコップの取り合いになってしまう。最後に「おやおや，二人とも一生懸命になっていますよ。」というナレーションが入って終わる。

葛藤場面②（役の取り合い／女児用）　クマとパンダがお母さんごっこをすることになる。パンダが「じゃあ，私，お母さんの役をやるー。」と言うと，クマは「ダメ，私がお母さんをやるから，パンダちゃんは赤ちゃんの役をやって。」と言う。パンダは「イヤ。」と答え，お母さんの役をめぐって二人は口論を始める。最後に「おやおや，二人とも一生懸命になっていますよ。」というナレーションが入って終わる。

葛藤場面②（役の取り合い／男児用）　クマとパンダがオーレンジャーごっこをすることになる。パンダが「じゃあ，僕，オーレンジャーの役をやるー。」と言うと，クマは「ダメ，僕がオーレンジャーをやるから，パンダくんは悪者の役をやって。」と言う。パンダは「イヤ。」と答え，オーレンジャーの役をめぐってふたりは口論を始める。最後に「おやおや，二人とも一生懸命になっていますよ。」というナレーションが入って終わる。

iv）手 続 き

被験児はテーブルを前にしてイスに座り，実験者は被験児と垂直となる位置に座った。初めに，きょうだいがいるかいないかが尋ねられた。いると答えた場合は，兄弟姉妹のうち誰がいて，今何歳なのかが尋ねられた。その後「これから，ビデオで人形劇のお話しを見てもらいます。見終わったら，お話しのつづきがどうなるかを○○ちゃんに考えてもらうので，どんなお話しかよく見ていてください。」と教示があり，続いて，被験児から約2メートルの距離に置いたテレビにより，実験材料である仮想の対人葛藤場面のビデオが放映された。

葛藤場面①（物の取り合い）の放映が終了すると，「今のはどんなお話しかわかりましたか？」と質問された。「ケンカ」・「取り合い」と答えた場合に内容が理解できたと判断され，以降の質問に移った。答えられなかった被験児に対しては，「誰と誰がでてきましたか？……そして何をしていたのでしょう？……」等の補足質問がなされた。

続いて，実演法と言語法による回答が求められた。実演法では，「今のお話しの続きはどうなるのでしょう。ちょっと考えて，このお人形で実際にやってみて下さい。」と指示され，被験児は人形を受取り，実験者がもう一方の人形役となり，演じてもらった。言語法では，「○○ちゃんだったら，こんな時どうしますか？」と尋ねられ，口頭で回答が求められた。

葛藤場面②（役の取り合い）の放映が終了すると，葛藤場面①と同様の手続きで実演法と言語法による2つの反応が測定された。

実験の状況はすべてビデオカメラにより録画された。また，順序の効果を相殺するため，実演法を先に行う園児と，言語法を先に行う園児はカウンターバランスされた。

v）データの分析方法

実験で得られた実演反応，言語反応は，小林（1993）を参照し，以下の5つのカテゴリーに分類された。

P：向社会的反応（Prosocial）；貸してあげる，役を譲ってあげる，等。

R：社会的ルールの使用（Rule-oriented）；じゃんけんで決める，順番にする，等。

A：葛藤の回避（Avoidant）；泣く，やめてしまう，わからない，等。

E：自己中心的反応（Egocentric）；スコップを譲らない，自分がやると言い張る，等。

S：ステレオタイプな回答（Stereotayped）；謝るだけ，ケンカはだめ，困る，等。

5つのカテゴリーのうち，PとRは社会的に望ましい（高次の）反応とみなされ，A，E，Sは社会的に望ましくない（低次の）反応とみなされた。物の取り合い場面，役の取り合い場面，それぞれ別々に，実演反応・言語反応ともに高次の反応である群（以下，高高群と略す），実演反応が高次で言語反応が低次の反応の群（以下，高低群と略す），実演反応は低次で言語反応が高次の群（低高群と略す），両反応ともに低次の反応である群（以下，低低群と略す）の4群に再び分類した。

(2) 母親の養育態度

i）被 調 査 者

実験で被験児となった幼児の母親38名に対して調査が行われた。

ii）調査時期，および調査場所

1995年12月1日～20日の期間。調査用紙は担任を通じて母親に配布され，自宅で回答を終えた後，持参および返送にて回収された。回収率は北大幼児園で100%，私立幼稚園で92.1%であった。

iii）調 査 用 紙

調査用紙は東・柏木・Hess（1981）の研究をもとにして作成された（付録参照）。測定された内容は，自分の子どもに対する①発達期待と②しつけ方略であった。以下にそれぞれについて詳しく述べる。

①子どもに対する発達期待の測定

東ら（1981）の研究において，母親のしつけの実態を知るための面接に使用された，母親の発達期待を測定するカード分類課題（Developmental Expectation Questionaire : DEQ）を参考に作成された。就学前の発達課題と考えられる41の行動項目の各項目について，それがいつ頃までに達成されていたからよいと期待するかという問に対し，「4歳になるまでに」「4，5歳ころ」「6歳をすぎてから」の3件法で回答が求められた。また，同時に各項目について，その項目ができるようになることがどのくらい重要であると考えるかという問に対し，「絶対に重要」「かなり重要」「やや重要」「あまり重要ではない」の4件法で回答が求められた。

また，41の発達期待項目のうち37項目は7領域の項目として分類された（表1）。それぞれの領域の得点は，本研究においては，学校得点，従順得点，礼儀得点，情緒得点，自立得点，社会得点，主張得点として分析に利用した。

②子どもに対するしつけ方略の測定

東ら（1981）の面接の中で用いられた質問紙（Mother Teacher Questionaire : MTQ）の一部が使用された。調査用紙に書かれた10項目の子どもの行動について，そのような行動を自分の子どもがとった場合，その子どもに向かって何と言うかについて，自由記述により回答が求められた。

①，②ともに，被験児である子どもを想定して回答するように明記されていた。幼児の実験結果とその幼児の母親の調査結果を対応させて分析するために，調査用紙には在園している子どもの名前を記入してもらった。

iv）調査結果の分析方法

①子どもに対する発達期待

調査用紙に記述されている項目がいつごろまでにできるようになってほしいか，を尋ねた質問においては，「4歳になるまでに」を3点，「4，5歳頃」を2点，「6歳をすぎてから」を1点として得点化し，全41項目の点数を合計したものを，その母親の「期待得点」とした。期待得点は，得点が高いほど，予どもに，より早く，記述されている項目ができるようになってほしいと考えていることの指標とした（表1；領域分類表）。

調査用紙に記述されている項目ができるようになることが，どのくらい重要であると考えるか，を尋ねた質問では，「絶対に重要」を4点，「かなり重要」を3点，「やや重要」を2点，「あまり重要ではない」を1点として得点化した。そして，全41項目の点数の合計を，その母親の「重要得点」とした。重要得点は，得点が高いほど，より多くのことを子どもにできるようになってほしいと考えていることの指標とした。

表1 発達期待項目の7領域分類表

学校関係スキル	
No. 34	30ページくらいの絵の多い童話を一人で読み通すことができる。
No. 37	時計が読める（15分単位ぐらいまで）。
No. 41	興味のあることを図鑑や事典で調べる。
従順	
No. 6	呼ばれたらすぐに来るか，返事をする。
No. 13	おもしろい本やテレビを見ているのに，お母さんのお手伝いを頼まれたらすぐにやめて手伝う。
No. 20	悪いことをしていて注意されたら，すぐにやめる。
No. 26	言いつけられた仕事はすぐにする。
No. 36	親からいけないと言われたら，なぜなのかはわからなくても，言うことをきく。
礼儀	
No. 3	大人に何かを頼む時，「～させて下さい」「～してちょうだい」という風なていねいな言い方をする。
No. 10	朝，家族に「おはよう」とあいさつをする。
No. 28	テーブルに足を乗せたり，足で動かしたりしない。
情緒的成熟	
No. 4	やたらに泣かない。
No. 24	がっかりしたり欲求不満になっても，泣いてしまわずに我慢する。
No. 29	いつまでも怒ってないで，自分で機嫌を直す。
No. 39	赤ちゃん言葉は使わなくなる。
自立	
No. 1	大人に手伝ってもらわずに，一人で食事ができる。
No. 2	おこづかいを大事にちゃんと使える。
No. 8	自分の脱いだ服を始末できる（たたんだり，引出しにしまったり）
No. 9	外に一人で遊びに行ける。
No. 15	決まったお手伝いができる。
No. 16	一人遊びができる。
No. 22	一人で電話をかけられる。
No. 27	1時間ぐらい一人で留守番をする。
社会的スキル	
No. 5	自分のおもちゃを友達にも貸してあげて，一緒に遊べる。
No. 12	友達を説得して，自分が考えていること，したいと思っていることを通すことができる。
No. 19	友達と考えが合わない時，喧嘩をせずに適当な解決をつけられる。
No. 30	友達と遊ぶ時，リーダーシップがとれる。
No. 35	ゲームをしている時，自分の番まで待てる。
No. 38	友達の気持ちに思いやりを持つ。
言語による自己主張	
No. 7	納得がいかない場合は，説明を求める。
No. 14	意見や希望を聞かれたら，はっきり述べる。
No. 21	質問されたら，はきはき答える。
No. 25	自分の考えを，他の人達にちゃんと主張できる。
No. 40	自分の考えや，その理由を，他の人にわかるように説明する。

②子どもに対するしつけ方略

得られた回答は，東ら（1981）の研究を参考に，以下の9つのカテゴリーのいずれかに分類された。

a：直接命令；子どもに全く猶予を与えず，服従を強く求める，最も圧力，統制の強いもの。
b：ゆるやかな命令；服従を求める命令だが，ややゆるやかな表現をとる場合（譲歩や代案は認めない）。
c：変形命令；子どもが服従しやすいように，元の問題を変え，条件をゆるめた代案を出す，だます，などして従わせようとする命令。
d：代償；服従を求める代わりに，ごほうびを与えたり，代償物を提示したりする場合。
e：譲歩・妥協；一定期間に限ってとか一部だけ許容するなど，完全な服従を求めず，一部譲歩している場合
f：説得・暗示；明示的に服従を求めないが，問いかけ，語りかけ，示唆などで，子どもになすべき行為（服従）を暗示するもの。「○○すると××になる」など，問題の原因・結果だけを述べるものも含まれる。
g：全面的容認；命令・説明は全くせず，最初から子どものいいなりになる。
h：説得後容認；最初は服従を求めるよう説得するが，それでもだめなら子どもの言い分を容認してしまう場合。
i：評定不能；a～hのいずれにも該当しないもの。問題の状況が当の子どもには起こらないという場合も含む。

東ら（1981）を参考に，aを4点，bからeを3点，fを2点，gからhを1点として得点化した。全10項目の得点を合計したものを，その母親の「しつけ得点」とした。しつけ得点は，予どもの逸脱行動を統御する際，母親の統制力・圧力がその程度強いか，つまり，子どもの側の自由がどの程度許容されているかに関する測度とみなし，得点が高いほど母親の子どもに対する統制力が強いことを示す指標とした。

本研究では，「期待得点」「重要度得点」「しつけ得点」の3得点の他に，その母親の養育態度を測る統合された測度として，これら3得点を合計したものを「養育得点」とした。

図1に本研究の分析に用いた変数一覧を示す。

3．結　　果

(1) 子どもの対人葛藤場面における解決方略と出生順位

表2に，言語反応と実演反応における各カテゴリーの頻度を示す。言語反応と実演反応は必ずしも一貫しておらず，この2つの反応は異なる側面の反応とみなすことができる。本研究の結果では，実演反応ではE反応とR反応が多く，言語反応ではP反応とR反応が多くみられた。表3にもとづき，表4に出生順位別にみた各解決方略群の内訳を示す。これに対し，解決方略のちがいについてχ^2検定を実施したところ，長子・末子間では人数の偏りは有意ではなく，解決方略にちがいがあるとはいえなかった。性差が有意であったので（物：$\chi^2(2)=12.11$，役：$\chi^2(2)=10.95$，いずれも$p<.01$），兄と弟，姉と妹を比べたところ，人数の偏りが有意であった（物：$\chi^2(2)=14.50$，役：$\chi^2(2)=12.83$，いずれも$p<.05$）。残差分析の結果，弟は，高高群が少なく，高低群，低低群が多かった。兄については有意な偏りはみられなかった。姉は高高群が多く，高低群が少なかった。妹については有意な偏りはみられなかった。したがって，長子と末子では解決方略の社会的望ましさにちがいがあると言える。

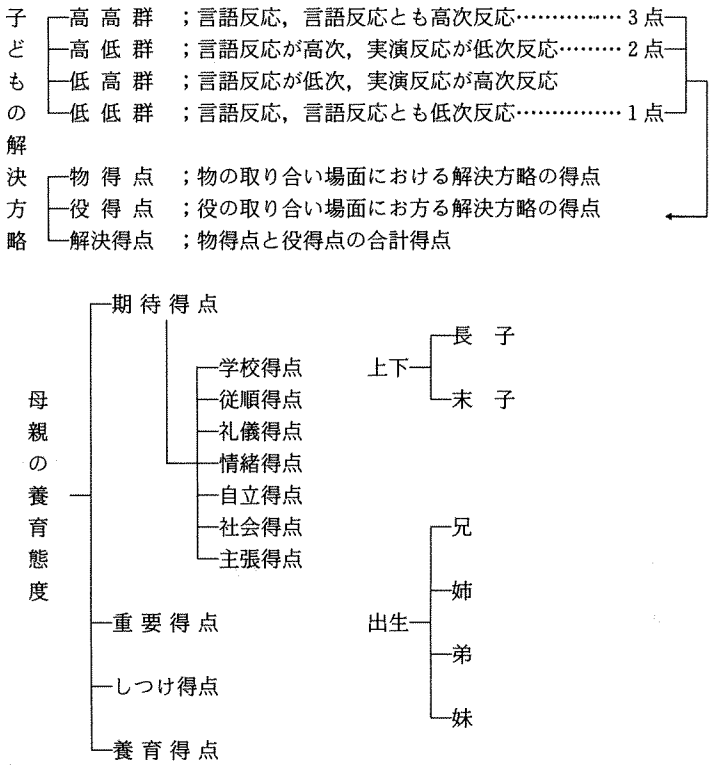


図1　本研究で用いた変数

表2－1　物の取り合い場面における各カテゴリーに分類された反応
（単位：人）

実演反応＼言語反応	A	E	S	P	R	
A	2	0	1	2	2	7
E	1	3	2	5	5	16
S	1	0	0	0	0	1
P	0	0	0	1	0	1
R	0	0	0	7	6	13
	4	3	3	15	13	38

表２－２　役の取り合い場面における各カテゴリーに分類された反応
（単位：人）

言語反応

実演反応	A	E	S	P	R	
A	3	0	0	2	3	8
E	5	2	3	1	3	14
S	0	0	0	0	0	0
P	0	0	0	1	2	3
R	0	0	0	6	7	13
	8	2	3	10	15	

表３　各解決方略群の人数

物の取り合い場面

役の取り合い場面	高高群	高低群	低高群	低低群	
高高群	11	4	0	1	16
高低群	3	5	0	0	8
低高群	0	0	0	0	0
低低群	0	5	0	8	13
	14	14	0	10	38

表４－１　物場面における出生別各解決方略群の人数

	高高群	高低群	低低群	
兄	2	4	3	9
姉	6	1	3	10
弟	0	7	3	10
妹	6	2	1	9
	14	14	10	38

表４－２　役場面における出生別各解決方略群の人数

	高高群	高低群	低低群	
兄	3	3	3	9
姉	6	1	3	10
弟	0	4	6	10
妹	7	1	1	9
	16	9	13	38

(2) 母親の養育態度と出生順位

表5に各養育態度の項目相関係数を示す。表6に出生順位別の各養育態度得点の平均を示す。t検定の結果，期待得点において，長子と末子の差に有意な傾向がみられた（$t(33)=1.86$, $p<.10$)。よって，末子よりも長子に対して母親は「早い時期に多くの項目をできるようになっていてほしい」と考えていることが示された。これは，東ら（1987）の研究結果と一致するものであった。

(3) 子どもの対人葛藤場面における解決方略と母親の養育態度

表7に解決方略別の各養育態度得点の平均を示す。分散分析を実施したところ「重要得点」と「しつけ得点」について，解決方略のちがいによる有意な差はみられなかった。重要得点としつけ得点に差がないとすると，この2得点と「期待得点」の3得点を合計した「養育得点」の差は，「期待得点」の差と考えられる。実際，期待得点と養育得点はすべての分析において全く同じ結果となった。

表5 各養育態度得点間の相関

	期待	重要	しつけ	養育	学校	従順	礼儀	情緒	自立	社会
期待										
重要	.092									
しつけ	.069	.196								
養育	.683**	.759**	.387*							
学校	.431**	.025	.134	.308+						
従順	.808**	.101	.117	.583**	.266					
礼儀	.616**	.095	-.076	.420*	.068	.428				
情緒	.771**	.222	.051	.627**	.326+	.580**	.406*			
自立	.651**	.268	-.157	.539**	.550**	.352*	.421*	.385*		
社会	.838**	.064	.204	.595**	.200	.690**	.638**	.529**	.453*	
主張	.679**	-.157	.120	.335*	.154	.527**	.188	.476**	.313+	.531**

35観測資料を計算に使用。

** $p<.01$
* $p<.05$
+ $p<.10$

表6 出生別各養育態度得点の平均

各得点	兄（N＝8）	姉（N＝9）	弟（N＝9）	妹（N＝9）
期待	74.13(9.00)	80.11(8.93)	69.33(6.63)	72.44(12.75)
学校	3.37(0.51)	3.44(0.88)	3.44(0.52)	3.44(0.88)
従順*	10.50(2.00)	11.55(2.24)	8.55(2.00)	9.33(1.93)
礼儀	6.87(1.35)	7.55(1.33)	7.00(1.22)	6.77(1.48)
情緒	8.25(1.48)	7.88(1.36)	7.88(1.36)	7.77(2.04)
自立	13.00(1.77)	13.55(3.00)	12.33(1.32)	13.44(2.45)
社会	10.62(2.06)	11.88(1.61)	10.55(1.66)	10.77(1.71)
主張**	8.12(1.45)	9.11(1.45)	6.55(1.13)	7.66(1.73)
重要	121.3 (11.36)	118.5 (12.38)	119.3 (8.17)	116.7 (12.51)
しつけ	30.25(2.94)	27.44(3.16)	27.11(4.22)	27.22(3.29)
養育	225.7 (17.35)	226.1 (15.89)	215.7 (12.77)	216.4 (18.96)

*$p<.05$

表7－1　物の取り合い場面における解決方略別各養育態度得点の平均

各得点	高高群(N＝14)	高低群(N＝12)	低低群(N＝9)
期　待**	80.42(10.05)	72.25(7.00)	66.33(9.88)
学校	3.57(0.85)	3.50(0.67)	3.11(0.33)
従順	10.78(2.32)	9.83(2.20)	8.88(2.02)
礼儀	7.21(1.36)	7.33(1.85)	6.44(1.59)
情緒*	8.64(1.08)	7.91(1.62)	6.88(1.53)
自立*	14.21(2.60)	12.41(1.50)	12.22(1.64)
社会*	11.71(1.68)	10.83(1.58)	10.00(1.80)
主張*	8.78(1.67)	7.50(1.44)	6.88(1.36)
重　要	121.7 (11.48)	114.3 (9.94)	120.6 (12.61)
しつけ	27.92(3.12)	28.08(4.87)	27.77(3.27)
養　育*	230.1 (16.61)	214.6 (15.99)	214.7 (5.05)

**p<.01
*p<.05

表7－2　役の取り合い場面における解決方略別各養育態度得点の平均

各得点	高高群(N＝16)	高低群(N＝8)	低低群(N＝11)
期　待	75.18(11.07)	77.87(11.07)	69.45(8.45)
学校	3.43(0.81)	3.37(0.51)	3.45(0.68)
従順+	10.43(2.27)	10.75(2.43)	8.72(1.79)
礼儀	7.12(1.36)	7.50(1.30)	6.63(1.28)
情緒	8.00(1.59)	8.37(1.50)	7.54(1.50)
自立	13.12(2.84)	13.37(1.59)	12.54(1.44)
社会+	11.00(1.46)	12.00(2.13)	10.18(1.66)
主張	8.25(1.73)	7.50(2.20)	7.54(1.12)
重　要	118.8 (12.68)	122.7 (9.00)	116.3 (11.40)
しつけ	27.25(2.81)	29.00(5.34)	28.18(3.71)
養　育	221.2 (17.88)	229.6 (18.12)	214.0 (14.16)

+p<.10

表8　各解決方略得点と養育態度得点の相関

	物	役	解決	期待	重要	しつけ
物						
役	.673**					
解決	.907**	.922**				
期待	.548**	.219	.412*			
重要	.077	.077	.084	.092		
しつけ	.013	-.123	-.063	.069	.196	
養育	.386*	.157	.292+	.683**	.759**	.387*

35観測資料を計算に使用。

** p<.01
* p<.05
+ p<.10

期待得点について分散分析したところ，物場面における解決方略の群間で有意な差が認められた（$F(2, 32)=6.94$, $p<.01$）。多重比較の結果，高低群，低低群より高高群の方が得点が高いことが示された（ともに$p<.05$）。すなわち，母親の期待が大きいほど，社会的に望ましい解決方略をとりやすい結果が示された。

役場面における解決方略については，期待得点の群の差は有意ではなかった。

4．考　　察

(1) 仮説「長子は末子よりも早期に社会的に望ましい解決方略をとるようになる」について

兄と弟では，兄に対して，弟の方が社会的望ましさにおいて低次の反応が多かった。この結果は，長子が末子よりも早く社会的に望ましい解決方略をとるようになっていると考えられ，仮説は支持されたといえる。姉と妹では，妹に対して，姉の方が社会的望ましさにおいて高次の反応が多く，男児の結果と同様に仮説は支持されたと言えよう。対人葛藤場面における子どもの対人交渉能力について検討した渡部（1995）の研究によると，女児の方が男児よりも対人交渉方略のレベルが高いという。このことが，末子である妹においても高高群が多かったことの説明となる。つまり，女児はすでに出生順位に関係なく，主張性の発達の社会的に望ましい解決方略をとれるところまで達してしまっている可能性があったと考えられる。

(2) 仮説「母親は長子に対してより制限的な養育態度を示す」について

末子よりも長子に対して母親は「早い時期に多くの項目をできるようになっていてほしい」というふうに考えている可能性があった。

西村（1997）は，出生順位と幼児期の自称や他称の関係について実態調査を実施し，長子・中間子において，弟・妹がそばにいるときに自分のことを「おにいちゃん」または「おねえちゃん」と呼び，一人場面での呼び方と使い分けをしていることが多いことを示している。また，そのような使い分けをする幼児の母親は，使い分けをしない幼児の母親よりも多く母親自身が使い分けをしていること，さらに，きょうだいもまた使い分けをしていることが示された。このことは末子よりも長子に対して役割意識を与えやすい状況を生み出しているとも考えられ，母親の意識を反映しているとも考えることができる。

(3) 仮説「母親の養育態度が制限的であるほど社会的に望ましい解決方略をとる」について

「どのくらい多くのことを子どもにできるようになってほしいか」，「子どもにどのようなしつけ方略を用いるか」ということと，対人葛藤場面における解決方略と関係が明かではなかったが，期待得点との関係が示唆された。

すなわち，「社会的に望ましいとされる解決方略を知識として持っていない」子どもと「社会的に望ましい解決方略を知識として持ってはいるが，まだ自分の希望がまさっている」子どもよりも，「自分の希望を抑えて，社会的に望ましいとされる解決方略をとる」子どものほうが，母親の期待が大きいということが示された。つまり，母親の期待が大きいほど，自分の希望によらず社会的に望ましい解決方略をとりやすいという仮説を支持した。

役場面については，期待得点は解決方略群間で有意な差があるとはいえなかったが，幼児の反応に，「～ごっこはしないからわからない」という回答や，葛藤場面をそのまま真似したような回答が多かったことから，幼児の反応を引き出す材料として検討が不十分だったことが理由とし

て挙げられよう。

(4) 子どもの解決方略，母親の養育態度，出生順位の関係

以上を総合すると，解決方略と長子・末子によるちがいはみられなかったが，社会的望ましさの高い解決方略をとる幼児の母親の期待が大きいこと，長子のほうが末子よりも母親の期待が大きいことから，「長子のほうが末子よりも，母親の期待が大きく，社会的に望ましい解決方略を用いる」可能性が示唆された。実際，解決方略と出生順位の分析において，性別にみれば兄と弟ではちがいがみられた。また，統計的な差はなかったものの，物場面でも役場面でも，長子のほうが社会的望ましさの高い解決方略をとっている幼児が多く，サンプル数を増やすことによって，この結果はより明らかにできるものと思われる。

以上，本研究では「長子の方が末子よりも，より制限的なしつけをされることにより，自分の希望・意見を抑えて，社会的に望ましい解決方略をとりやすい」という可能性が示唆された。

本論文は，北海道大学教育学部平成8年度卒業論文をもとに加筆・修正したものである。この場をお借りして，ご協力くださった皆様，とりわけ，北大幼児園，発寒幼稚園の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

東　洋・柏木恵子・Hess, R. D.　1981　母親の養育態度・行動と子どもの知的発達 —— 日米比較研究 —— 東京大学出版会.

張　美蓉　1997　中国の子どもの性格と親の養育態度の関連について —— 日本との比較研究を通して —— 小児の精神と神経，37，301－310.

Deluty, R. H. 1979 Children's action tendency scale : a self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1061–1071.

濱口佳和　1994　児童用主張性尺度の構成　教育心理学研究，42，463－470.

柏木恵子　1988　幼児期における「自己の発達」東京大学出版会　91－109.

小林　真　1993　幼児の対人葛藤場面における社会的コンピテンスの研究　教育心理学研究，41，183－191.

Lazarus, A. A. 1973 On assertive behavior : a brief note. *Behavior Therapy*, 4, 697–699.

松田　惺　1986　自己意識の発達に関する最近の研究　教育心理学年報，25，54－63.

西村久美子　1997　きょうだい関係の呼称と向社会的行動に関する研究　北海道大学教育学部卒業論文（未刊行）.

章　永生　1989　独生子女家庭教育現状的研究　教育研究，6，30－36.

恒吉僚子・Boocock, S. S.　1997　育児の国際比較　NHK ブックス.

渡部玲二朗　1995　仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究 —— 年齢，性，他者との相互作用，及び人気の効果 —— 教育心理学研究，43，248－255.

Wolpe, J. 1958 Psychotherapy by reciprocal inhibition. Stanford Cali fornia : Stanford University Press.

山本愛子　1995　幼児の自己調整能力に関する発達的研究 —— 幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について —— 教育心理学研究，43，42－51.

依田　明・飯島　一恵　1981　出生順位と性格　横浜国立大学紀要，21，117－127.

依田 明 1978 家族関係の心理 有斐閣.
依田 明・深津千賀子 1963 出生順位と性格 教育心理学研究, 11, 239－246.